

平成5年度

英語の表現力を育てる指導法の研究

— 発話を促す場を継続的に取り入れて —

川崎市総合教育センター 英語科研究会議

英語の表現力を育てる指導法の研究

— 発話を促す場を継続的に取り入れて —

英語科研究会議

渡辺英一¹ 金子 勉² 鈴木紀子³ 大和田 徹⁴ 高橋太郎⁵ (平成4年度)
石原由美子⁶ (平成4年度) 正村和久⁷ (平成5年度)

要 約

英語教育に強く求められている表現力の育成, 中でも「話すこと」の指導においては、従来の「理解力」や「文法, 語彙能力」の育成より以上に, 今後はどれだけ「自己の意思, 考え, 意見を伝達できたか」ということや, 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が持てたか」ということに指導の重点が置かれている。

そこで本研究では, 生徒が積極的に発話しようとする場を, 日々の授業と外国語指導助手との協同授業 (Team Teaching) の中に位置づけ, 授業実践を行ってきた。

1. 相手の言ったことに, 何か反応し, 会話を続けようとする努力を, 「発話を促す場」の設定と共に, 習慣化させる。(ショウ・アンド・テル「SHOW & TELL」の技法)
2. 自然な流れの対話練習の中で, 対話に有効な表現や方略を, 継続的に指導し, 身につけさせていく。(作成資料『対話集』の利用)
3. 外国語指導助手との授業の中に, 発話を促す場や, 発展的な対話ができるような場を設定し, 外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度を養い, 自分の意見や考えを表現することに慣れさせる。

これらをねらいとした授業実践から, 指導上の有効な手立てが得られた。

キーワード: 英語教育, 表現力の育成, 話すこと, 発話, コミュニケーション

目 次

| | | | |
|----------------|----|------------------|-----|
| はじめに | | 3. 授業実践と考察 | 98 |
| I 主題設定の理由 | 92 | 4. 『資料集』の作成 | 105 |
| II 研究の方法 | 93 | IV まとめと今後の課題 | 105 |
| III 研究の内容および考察 | 95 | おわりに | |
| 1. 表現力の育成 | 95 | ・主な参考文献・指導助言者・資料 | |
| 2. 発話を促す場の設定 | 96 | | |

¹ 川崎市立野川中学校教諭 (主任研修員)

² 川崎市立長沢中学校教諭 (研修員)

³ 川崎市立宮前平中学校教諭 (研修員)

⁴ 川崎市立南加瀬中学校教諭 (研修員)

⁵ 川崎市臨港中学校教諭 (研修員)

⁶ 川崎市市民局国際室主幹 (前研修指導主事)

⁷ 川崎市総合教育センター研修指導主事

はじめに

近年、国際化の進展に伴い、互いに情報を送ったり、受けたりということに留まらない「コミュニケーション能力」、すなわち、相手からの情報を受け、自らの考えや意見等をいかに積極的に伝えることができるかということが求められる時代になってきている。外国の人々と、どのようにしてコミュニケーションを図り、「新しい時代の国際化」に対応していくかという点がクローズアップされ、私たちの重要な課題となっている。

中学校に入学した当初、多くの生徒たちが持つ願いや希望に「英語が話せるようになれば」、
「英語で自分の気持ちや考えをうまく表現できたら」等があるが、やがて学年が進むにつれて希望が薄れてしまったり、時には挫折してしまう生徒が出てくるといった現状がある。これは、「YES、あるいは、NOなど意思表示がはっきりできない」ことや、「どのように自分の気持ちや意見を表現すればよいのか分からない」等に問題があると考えられる。そこで、身近な題材に関心を持たせ、個々の豊かな発想を生かした『表現力』を徐々に育成していきたいという願いが本研究の出発点である。

I 主題設定の理由

新学習指導要領の外国語科の目標（平成元年3月告示）では、以下の三点が示されている。

- (1) 外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養うこと。 【能力の育成】
- (2) 外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。 【態度の育成】
- (3) 言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培うこと。 【国際理解の育成】

このように、外国語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が求められ、外国の言語や文化を知ることのみならず、日本の文化や日本人のものの見方や考え方等についても、相手に正しく伝達し、互いに理解していく必要がある。また、中学時代を出発にして生涯にわたり、言語や異文化について興味や関心を持ち続け、自ら学び続けていく意欲を養うという点が今回の改訂のねらいである。

表現力、中でも「話すこと」の指導において、従来の指導では、主に「文法、語彙能力」の育成に重点がおかれたが、今後は、語や文型の量的な知識のみを外国語の能力としないで、「意思の伝達力」や「コミュニケーションを図ろうとする態度」を育成することに重点を置いた指導を行っていく必要がある。

生徒は、「話の切り出ししかた」や「相手への反応、応答の仕方」、更に「不明な点をそのままにせず、質問すること」等に、日常の日本語の会話においてさえ慣れていない。自分の心の中で分かったことをそこで留まらせず、表現していく必要や、会話を続けていこうと努力する必要がある。

そこで、生徒が言いたいことや知りたいことを『発話できる場面』を、授業に、より多く設けることにより、表現力を育てていく指導法を研究することとし、次のように主題を設定した。

英語の表現力を育てる指導法の研究

～発話を促す場を継続的に取り入れて～

Ⅱ 研究の方法

1. 研究方法

「よいコミュニケーション」すなわち、互いに納得したことや、意見や考えが異なる点に何らかの反応を示し、不明なところや疑問点は尋ね、常に相手の言うことを受けて会話を続けていく大切さを理解させる。そして、生徒が積極的に「発話しようとする場」を授業の中に設定し、少しずつ英語の表現力を育成していくというねらいから、次のような仮説を設定した。

— 研究仮説 —

授業に、発話を促す場を取り入れ、対話を続けていくための方略に慣れさせる指導を継続的に行っていけば、英語の表現力が育成されるであろう。

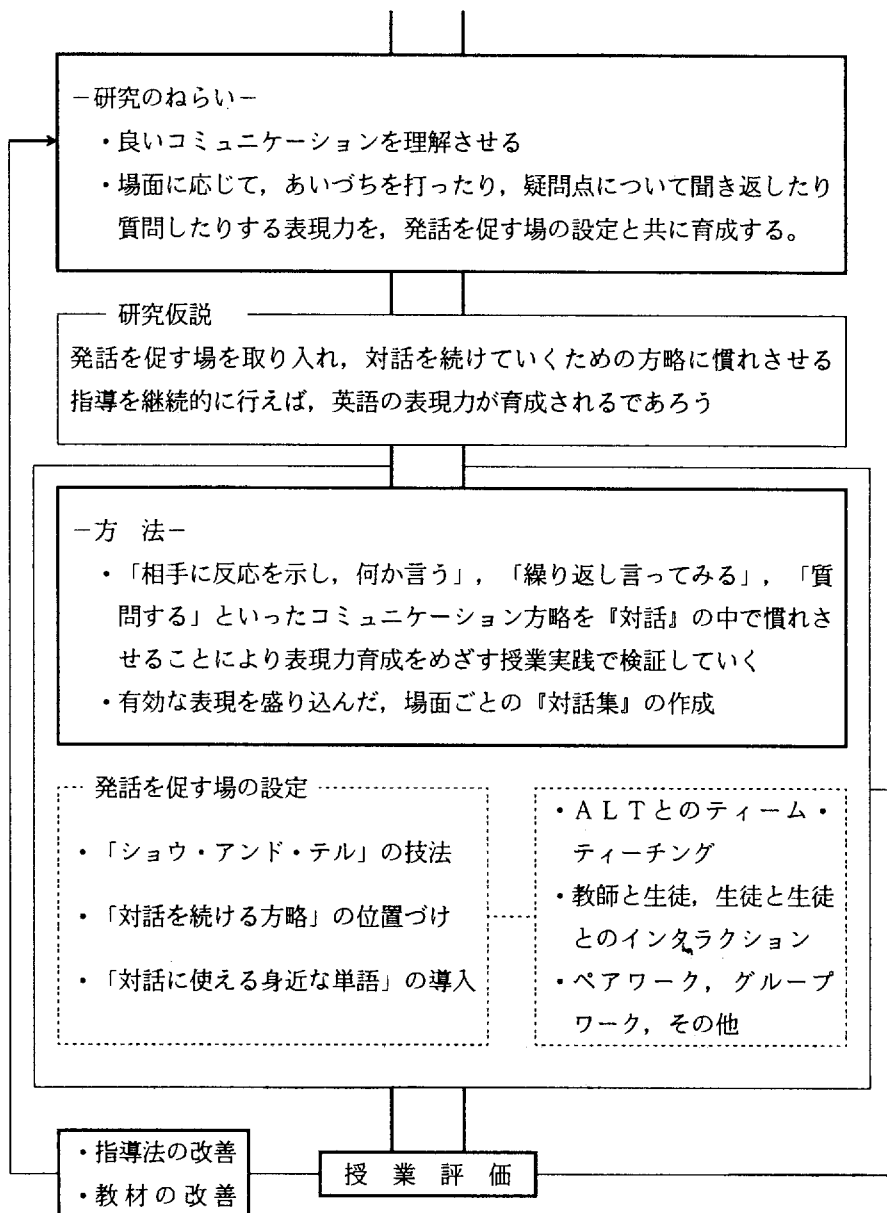
このねらいに沿って、主題に基づき、次のように研究を進めた。

- (1) 「発話を促す場」を継続的に取り入れた授業実践を、外国語指導助手（ALT）との協同授業（Team Teaching）を中心に行い、授業ごとのねらいが達成できたかを検証していく。
- (2) 「文法事項」「対話に有効な表現」「自己表現」を組み入れた場面ごとの『対話集』を作成する。また、この中のいくつかの場面をビデオに収め、教材として活用できるようにする。

2. 研究構想図

—新学習指導要領（1989年告示）外国語科の目標—

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。



3. 研究の経過

(1) 第1年次（平成4年度）

- ① 理論研究
 - ・新学習指導要領の目標および内容の分析
 - ・先行研究の調査、文献研究
- ② 仮説の設定
- ③ 授業実践および授業分析

(2) 第2年次(平成5年度)

- ① 理論研究
・文献研究
- ② 授業実践および授業分析
- ③ 『対話集』の作成およびビデオ教材等の作成
- ④ 研究のまとめ

Ⅲ 研究の内容および考察

1. 表現力の育成

(1) 英語科における表現力をどのようにとらえるか

聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの能力は、伝達の手段の観点から見ると、聞くことおよび話すことは音声を使用し、読むことおよび書くことは文字を使用することになり、言語使用の観点から見ると、聞くことおよび読むことは『理解』に、話すことおよび書くことは『表現』に分類される。英語科における表現力は、「音声および文字を用いて自分の考えや意見等を相手に伝える能力」のことを言い、この表現力の育成は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」とともに今、英語教育に強く求められている。

文部省教科調査官である影浦 攻氏は、「指導と評価」¹⁾の中で、表現力の育成によって次のような能力が身につくことが要求されると述べている。

- ① 教師や、他の生徒の英語を聞き、また自ら英語を使用することによって、その表現の使用の仕方が正しいかどうか判断できる。
- ② 場面にふさわしい表現が使用できる。
- ③ 対話練習や実際の対話を通して、外国人のものの見方や考え方を身につける。
- ④ 対話を自然に、スムーズに行うことができる。(何か反応したり、ことばをつけ加えたり、言い換えたり、あいづちを打ったり、話題を変えたりする表現を身につける。)

更に、表現力育成の上での留意事項として以下の点などを挙げている。

- ① 指導法の工夫、改善をする。
- ② 授業形態を工夫する。
- ③ 身近なことがらを話題にしながら、英語使用の機会を増やす。(間違いをその場で細かく訂正しない。)
- ④ 話題の展開を大切にす。(目標文の定着のみにとらわれない。)
- ⑤ 生徒の創造性を生かす。

留意事項にあるように、生徒が抵抗なく英語を使用しようとする機会や場の設定を授業の中に取り入れ、自然な流れの対話につながる発話が表現力育成の第一歩と考えた。

更に、この発話から場にふさわしい表現に発展させる指導法の工夫が必要となってくる。

¹⁾影浦 攻 「指導と評価」5月号 1991年

(2) 表現力をどのように育成するか

明海大学教授の和田 稔氏によれば、「表現」とは、すでに習得した語句や文を活用し、創造的に新しい語句や文を発する活動、もしくは創造的に新しい語句や文を発しようとする努力を伴う活動である。従ってその活動には、発話者である生徒の考えや感情などが含まれてくる、あるいは含めようとする努力がある。そして、この発話には間違いや、言い淀みや、繰り返しや、沈黙などが伴うという。また、「話すこと」のコミュニケーション能力を育成するための留意事項について次のように説明している。²⁾

- ① 「話すこと」を「話すこと」によって習得させる。—— 従来の言語活動は、発話練習や口頭練習であることが多かったが、これを実際に話すコミュニケーション活動とするように創意工夫した場面を設定する必要がある。
- ② 生徒のイニシアティブ(initiative)を大切にす。—— 生徒が能動的に行動する指導場面を工夫する必要がある。生徒自ら、話を切り出し、対話を持続するような場面、指導の工夫をすることが大切である。
- ③ 誤りを認め合うクラスにする。—— 「話すこと」の言語活動では、理想的な話し手はいない。誤りを認め合う学習場面を創りだすことが大切である。

本研究会議では、「言語使用」の能力をつけさせることを第一義とし、ことばをできるだけ実際の場面の中で、コミュニケーションの目的のために使用させ教えようとするコミュニケーション・アプローチの考え方をとり入れることとした。特に「何か反応して言う」「自分が聞いたことや分かったことを、ことばを使って表現する」、すなわち、発話を促す場を設定するところから、対話を続けることに慣れさせ表現力を育成する方向で研究を進めた。

2. 発話を促す場の設定

日々の日本語の対話や授業においても、なかなか質問が出てこなかったり、相手の質問に対する応答の仕方にも積極性が出てこないところから、まず「話すこと」について現状の問題点を挙げてみる。

- ① 良いコミュニケーションとはどんなものか、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけることの大切さ等を十分理解していない。
- ② 自分が分からない情報について、聞き返したり、何とか言い換え等を行って質問したりする習慣がついていない。
- ③ 日頃、よく目にするものや、会話に話題として出てくる身の回りのことを、英語で言えないので、身近なことや諸々の話題について話すことができない。

これらの現状の、問題解決のためには、まず、相手との良いコミュニケーションがとれるようになること、すなわち黙っていないで、相手の言うことが理解できたならば分かったという反応を、そうでなければ聞き返す、質問するなど、何らかの反応を示す大切さを理解させる必要がある。

²⁾ 和田 稔 『新学習指導要領の指導事例集 2 話すことの指導事例』 明治図書1990年 16, 17ページ

また、何らかの反応を「ことば」を使って表現する訓練が有効であるという理由から、「何か言ってみる」ことを意図とした『発話を促す場』の設定が必要であると考え、これを授業の中に取り入れて、こうした指導法の効果、有効性を探ることとした。

(1) ショウ・アンド・テル (Show & Tell) の技法

米国の幼稚園、小学校低学年で行われている話し方の練習をする時間で、自ら作ったおもちゃ、外国のコイン、飼っているペット等を実際にクラスに持ってきて、そのことについて発表を行う。みんなにわかりやすく説明する練習であると同時に、よく耳を傾けて「聞く態度」を養うことをねらいとしている。

また、「質問人間」にすることにも重点が置かれている。「質問人間」とは、他の人の発言に注意深く耳を傾けると同時に、自分の経験、考え方に照らし合わせて疑問と思うことはすぐにその場で問い、自分の認識や経験を豊にしようとする人間像のことである。つまり聞くという作業を受け身的なものから能動的なものにしていくということである。³⁾

「まず何か言ってみる」、「相手に何らかの反応を示す」ところを話すことの第一歩と考え、この手法を授業の中に取り入れて、話すことへの抵抗を取り除き、生徒のレスポンスにどのようなものがどれくらい出てくるかを、授業実践で検証した。【資料1】

(2) 発話から発展的な対話へ

ショウ・アンド・テルの技法を取り入れた授業実践における生徒のレスポンスの例には、個々の感想や意見、なんとか一言伝えようとした情報等、なかなか興味深いものが数多く出てきた。

とにかく何か言ってみる、なんとか自分の気持ちや伝えたい情報をそのまま伝えようとすることを意図した発話を促す場を設けた授業実践から、また新たにいくつかの問題点も浮き彫りにされてきた。

【問題点】

- ・「何か言う」時の、その場面に合った、より自然な表現が出てこない。
- ・より自然に、対話を続けていく難しさがある。
- ・考える時間を、生徒に十分与えることも必要である。

これらの問題点から、対話を続けていく上での良い方略や、不明な点・疑問点を尋ねる質問の仕方、身近なことがらや話題について話そうとする時の単語や表現方法を、何らかの有効な手だてを用いて指導していく必要が出てきた。

数多くの対話を続けるための方略の中から、どれが重要であるかを特定することは困難であるため、それらの方略から、次の三点を重点に、授業の中に位置づけ指導を試みることにした。

- ①まず相手に反応してみる（短い反応）、
- ②相手が言ったことを受け、繰り返し言ってみる、
- ③不明なところは質問する、という方略を対話のなかに組み入れて、発話から徐々に対話を続けていくところに至る指導法を授業実践の中で行い、その結果を考察してみた。

³⁾ 松香洋子 『娘と私の英語留学記』 玉川選書 1990年 122ページ

3. 授業実践と考察

《授業実践1》

(1) 指導目標

ショウ・アンド・テルを用いて、相手に反応し、自分のコメントを加えながら発表することができる。

(2) 展開例

ウォームアップ時に、数人の生徒の作品を用いてショウ・アンド・テルを行った。一人ひとりの発表ごとに、聞いている他の生徒は自分のコメントをノートに記入していく。

作品は、絵・写真・雑誌の切り抜き等を示してスピーチしていくが、教室の前の方での発表のため距離的に見づらい生徒には、教師が作品を持って示していく形をとった。スピーチを聞いた後、自分のコメントをノートに記入させ、指名によりその場ですぐ自分のコメントを発表していく。たとえ、書き終えていない時でも、すぐに自分のコメントを言わなければならない。この時、使用したい単語や表現が未習の場合は、日本語も一部使用してもよいこととした。自由でリラックスした雰囲気の中でコメントを言わせた。

コメントの例として生徒A、B、Cの発表と、それに対する他の生徒のコメントの主なものを挙げてみる。

生徒Aの発表（ジャイアンツ松井選手の写真を見せて）

コメ ント

This is Hideki Matsui. He is in Seiryō High School.
He is a good player. He is very great. He is nice.

⇒

I know him.
I like him, too.
I know him, too.

生徒Bの発表（自分の弟の写真を見せて）

He is my brother. His name is Yohei Matsukawa.
He is a third year student of an elementary school.
He is a big boy. He plays Kendo.

⇒

He is very tall.
I have a brother, too.
I want a brother.

生徒Cの発表（ペットの犬の写真を見せて）

This is my dog. My dog's name is Ema.
Ema has a sister. Her sister's name is Chiko.
My dog is pretty. I like Ema.

⇒

I don't have dogs.
It is pretty.
It is very cute.

【結果と考察】

この授業では、間違いを恐れず、とにかく何か言ってみよう、自分のコメントを加えようという目標で、8人の生徒を指名して、1人の発表者に対して4人の生徒にコメントを言わせた。多少の日本語も使用させている。書くという作業もとり入れているが、ごく短時間で各自のコメントを発表させた。書くことによって、反応が鈍くなることもない。

生徒は、相手に応答することに対して、教師側の予想以上に、抵抗なく、活発に活動できた。また、既習事項のI like～. I have～. 等も使用し、数多く自分なりのコメントを加えることができた。授業展開時のコミュニケーション・プラクティスにも自分のコメントをすぐに相手に伝えるショウ・アンド・テルの効果が反映されて、生徒同士よく活動している。

今後は、積極的に相手に問いかけたり、応答に対し、一語、一文で終わらせない指導の工夫が必要である。

《授業実践2》

(1) 指導目標

互いに、相手の発話に対し、短く応答するだけでなく、自分自身のコメントとして、更に一文加えることができる。

(2) 展開例

- ① Warm up & Reviewにおいて、教師の質問に対し、Yes/No等のshort answerで応答するだけでなく、あと1フレーズ、1センテンスをプラスさせるような指導を行った。

[例] T : Did you get up before 6:00 o'clock?
P : No, I didn't. I got up at 6:50.
T : What did you do after dinner last night?
P : I practiced the piano. It was hard.

- ② 文法事項の導入・練習・活動の際にも、Yes/No-answerの後に、自分に関することを、『プラス1』で表現させてみた。

[例] 生徒A : Were you studying math at 8:00 last night?
生徒B : No, I wasn't. I was watching TV then.
(Yes, I was. I like math very much.

- ③ 更に、これらの応用として、最後にペアで対話を作らせ（この中のブランクを穴埋めさせながら）発表させた。

以下が、対話のモデルであり、（ ）内に、自己表現させている。対話がより自然に流れるように配慮してモデルを考えた。

〔対話例〕

A : There was an earthquake last night.
B : ()
A : Were you at home?
B : Yes, I was. / No, I wasn't.
A : What were you doing then?
B : I was []ing
I was ア) surprised. イ) scared.
 ウ) afraid. エ) OK.

【結果と考察】

展開例①では、質問をなるべく身近で、しかもプラスワンさせやすい質問を選んで行った。生徒は、考えながらもなんとか表現しようとした。また展開例③において、既習事項の復習の際には、このような〔対話例〕を使った指導はたいへん有効である。今後は、自己をうまく表現できるような形容詞を少しずつ教えていったり、生徒同士でも質問を考えながら同様の活動をさせていくことが課題である。

最後のBの[] や、ア) からエ) の形容詞を選ぶところは比較的易しいが、最初のBの() の反応には、質問に対する反応ではなかったために、こうした反応に慣れてこない、なかなか難しいようであった。

相手の言った文が質問の文でなくとも、この対話の最初のBの反応として、I know. と反応したり、I don't like earthquakes. や、Yes, there was. などが、自らコメントとして出てくるようにさせていきたい。

今後は、こうした対話の練習から実際の自由な対話への発展も考えているが、そのためには、日頃から、誤りを恐れずに、積極的に対話させることが必要である。継続して指導していかなければならない。

《授業実践3》

(1) 指導目標

ショウ・アンド・テルを発展させ、相手の知らないことを既習の英語で表現し、理解させることができる。

(2) 展開例

① 場面の設定として、ALTがわからない「日本語」（職業名）をグループ（生徒4名で1グループ編成）で考えたヒントを英語でALTに与え、対話をしながら、日本語と英語で「どんなふうに表現して、何と言えば良いか」という場面の設定をした。

以下が主な職業名と、生徒がグループで考えALTに表現した文である。

[例]

| | |
|-------------------|--|
| (ア) SEKITORI (関取) | 英語のヒント: 1. He is very fat. 2. He is a strong man. 3. He puts on "Yukata". |
| (イ) RYOUSI (漁師) | 英語のヒント: 1. He like fish. 2. He have a boat. |
| (ウ) DAIKU (大工) | 英語のヒント: 1. He is a strong man. 2. He has a hammer. 3. He has a saw, too. (原文のまま) |

更に、Activityでは、それぞれの班が、アニメーションのキャラクターの絵を用意し、ALTからの“Who . . . ?”の質問に対して応答し、それだけではなくプラス1として「何か説明を加える」という場を設定した。

[例]

| |
|---|
| (ドラエモンの絵を示して) 生徒: Look at this picture. ALT: OK. Who is it? 生徒: It is "DORAEMON". ALT: Is it a cat? 生徒: No, it isn't. <u>It is a robot.</u> |
| (ミサエの絵を示して) 生徒: Look at this picture. ALT: OK. Who is it? 生徒: It is "MISAE". <u>She is Crayon Shinchan's mother.</u> ALT: Oh, I see. |

【結果と考察】

生徒たちは、なんとかしてALTに、日本の職業名を教えようと努力していた。英語のヒントを作るために、生徒自ら和英辞典を使って単語や表現を調べたり、お互いに相談をしながら極めて意欲的に取り組んでいた。

第1学年の入門期においては、まだ多くの単語も使用できず（動詞はbe動詞のみ既習）、自ら反応してすぐにコメント等を加えることが困難であった。また、文法的な誤りもたくさん見られたが、その都度訂正することなくALTと対話させることによってのびのびと活動させることができた。生徒たちは、英語が通じた喜びを感じていた。

今後は、日常の対話で数多く使えるような単語や文を、毎時間少しずつ指導して、語彙や基本的でやさしい表現を増やしていく手だてを講じる必要性を感じた。

《授業実践4》

(1) 指導目標

ショウ・アンド・テルを発展させ、対話に有効な英語表現を使うことができる。

(2) 展開例

ウォームアップ時において、2名の生徒に英文日記を発表をさせ、内容理解をした後すぐに何かコメントをノートに書かせた。その後、指名により、そのコメントを言わせた。ノートに書いている途中でであっても、何かコメントを言わせるようにした。

① 一人目の発表（五色沼に行った時の思い出）に対するコメント

- I didn't go to Goshikinuma.
- I didn't see Goshikinuma. I want to see Goshikinuma.
- I want to go to Gohsikinuma.

② 二人目の発表（NEC祭りに出かけて）に対するコメント

- I went to NEC festival, too.
- Oh, you ate too much. That's great!

本時の基本文 (key sentences) のdrill の後に位置づけた『対話』において、この対話が、より自然に流れていくように、「対話に有効な表現」を組み入れた。

「相手に問いかける表現」, 「相手の言ったことを繰り返す表現」, 「つなぎの表現や感想を述べるもの」として、次のようなものを組み入れた。

Oh, really?
Oh, you are?
How about you?

Oh, I see.
Let me see.

That's good.
That's great.
That's too bad.

ペアのスキット練習の中では、本時に指導し、習得させたい英語表現を組み入れた。

[ペア練習時の対話発表例]

A : Today I'm going to go to the art room after school.
B : Oh, you are?
A : Yes. How about you?
B : I'm going to go to the club.

A : Oh, I see. But I'm not going to the club.

【結果と考察】

英文日記に対するコメントでは、自分の知っている表現で、すぐ反応し、自分なりのコメントを加えることができた。必ず一文で発表することを指示したが、中には二文で表現した生徒もいた。また、ALTの質問に対する応答の中では、文法的な誤りがあった生徒もいたが、コミュニケーションは十分図れた。ただし、「日本独自のもの」などをALTに説明することは、語彙や表現力の点でまだまだ困難であった。

ALTとのフリー対話では、基本文を理解し、それを使用した表現は、ほとんどの生徒ができてきている。しかし、対話が自然に続くような部分の発話（上記の対話に有効な英語表現）は、まだ定着していない。この発話を促すには、これらの英語表現を定着させることをねらいとした場面設定が必要である。また、答えに詰まってしまった時の表現方法も、今後指導していく必要がある。

《授業実践5》

(1) 指導目標

ショウ・アンド・テルを発展させ、相手の知らないことを英語で表現し、理解させることができる。また、日本語と英語のことばや音・リズムの違いやおもしろさを知ることができる。

(2) 展開例

基本文の導入部で、英語早口ことばを題材としたdialogを、事前にALTと相談して作成した。また、このdialogの英語の早口ことばの部分日本語の早口ことばに変えALTに教えた。（パートを変える）

更に、activitiesでは、4人グループを作り、「ALTに日本語を教えよう」ということで、職業や動・植物などの説明を考えさせた。

〔英語の早口ことば〕

“English Tongue Twister” より

Peter Piper picked a peck of pickled pepper;
A peck of pickled pepper Peter Piper picked;
If Peter Piper picked a peck of pickled pepper,
Where's the peck of pickled pepper Peter Piper picked?

〔ALTに日本語を教えよう！〕

〔例〕 “蟹”

S: : Can you read this *kanji* ?

ALT: No, I can't. Please say it.

S: : OK. It's *KANI*. Do you know this?

ALT: Can you give me a hint?

S₁ : It's an animal.
A L T : Can I have another hint?
S₂ : It's delicious.
A L T : Please another hint?
S₃ : It has eight legs.
A L T : Is it an octopus?
S₄ : No. It lives on the beach.
A L T : Is it a crab?
S : That's right.

以下に，“日本語”と生徒の考えた英語のヒントを挙げてみる。

(あじさい)
“紫陽花”

| |
|---|
| It's a flower. It blooms in June. It's blue, pink or purple. It blooms in rainy seasons. |
|---|

(パンダ)
“大熊猫”

| |
|--|
| This is an animal. It is big. This color is black and white. It lives in China. |
|--|

“花火”

| |
|---|
| I play it in the night. I play it in summer. It is beautiful. I play it with using fire. |
|---|

【結果と考察】

A L TとJ T Eの会話の設定が自然だったことや，A L Tと生徒たちの会話も自然に流れたことから，良い雰囲気です授業が行われた。この意味で，早口ことばは効果的で，A L Tの早口ことばを聞き，驚きや関心を示していた。生徒は，間違いを恐れず，楽しく生き生きと活動していた。

A L Tが活躍する場面が多くとられていたので，生徒にとって英語の量的なインプットも多く，生徒の発話を促すことにつながっている。

英語を使いヒントを与えることで，日本語のことばをA L Tに理解させることができた。また，英語で伝わらなかったことばについても，絵を板書するという方法でコミュニケーション

を図ろうと努力し、成功させていた。

日本語をALTに教えるという設定は、生徒たちを動機づけ、意欲的に活動に取り組ませることにつながる。

語彙に関することでは、be動詞だけでなく一般動詞や形容詞も使い、文章がふくらみ、情報伝達に効果をもたらしている。また、日頃から教科書以外の単語についても、分野別に少しずつ指導していたため、ALTの英語を聞いて抵抗なくYes / Noで答えられ、スムーズな対応ができ、activitiesを成功させることができた。

ALTは情報がうまくつかめないときに、“Can you give me another hint?”等を盛んに使い情報を得ようとしている。また逆に、生徒がこのような表現を使ってALTから新しい情報を聞き出すような活動ができるようになれば、更に発展につながる。例えば、全く新しい英語をJTEがALTに与え、それをALTが生徒に英語のヒントを与え、伝達し、理解させるといった方法等が考えられる。「自発的な発話」という点では、今後指導していく上での課題である。

4. 『資料集』の作成【資料2】

(1) 「文法事項」「対話に有効な表現」「自己表現」を組み入れた『対話集』の作成

教科書(1, 2年)の基本文を中心とした文法事項を網羅したdialogに、コミュニケーションを図る上で有効な方略を自然な形で入れ、更に生徒に自己表現させることができる対話集を作成した。一部ビデオに収め、教材として活用できるようにした。

(2) 『対話に使える身近な単語』の作成

スポーツ、机の上・部屋の中、食べ物・飲み物、動植物等に関する英単語を分類別にリストアップし、日本語の意味と読み方(カタカナ表記による)をつけた単語集を作成した。身近な単語を継続的に指導していくことは、生徒が自己表現する時にも語彙、関心度の点で良い影響をもたらす、ALTとのフリー会話にも有効である。

(3) 『対話に有効な英語表現』の作成

対話に効果的に使える「聞き返し」「あいづち」「賛成する」等の英語表現を収めた。

IV まとめと今後の課題

本研究は、「話すこと」を通した英語の表現力の育成をめざし、「発話を促す場」の設定に重点を置いた日々の授業とALTとのチーム・ティーチングによって、その指導法を研究していくことを大きな柱とした。授業実践を通して、次のような成果を得ることができたが、いくつかの問題点、課題も残すことになった。これらは今後の指導において、また新たな目標を設定し、意欲的に取り組んでいきたいと思っている。

1. 授業におけるショウ・アンド・テルの位置づけ

人の話を聞いて、それに何か反応し言ってみることや、自分の意見を一語、一文でいいから発表することを授業のウォームアップ時に試みたが、生徒は抵抗なく反応を示した。既習の単語や文を使用し、自らの意見を発表することができた。

日本語の使用も一部認め、とにかく自由に語れる時間を授業の中に設定することは、コミュニケーションを図る第一歩として、有効な手だてであると言える。

相手の言うことが理解できた時、よく分からない時、自分も相手と同意見の時などの反応の例を指導してきたが、生徒から出てきた反応が不完全であっても、それを訂正することより、その生徒が考えた視点を大切に、励ましの評価を与えていくことは、その後の成長につながってくる。

日常生活では英語を使用する場面はほとんどないが、こうした発話を促す場を授業に設定することによって、生徒は意欲、関心を持って表現しようとするのが分かった。

2. 自然な流れの対話から図ることができるコミュニケーション

黙っていることなく、何か意思を表す上で使えるコミュニケーション方略はたいへん多岐にわたり過ぎていたため、相手の言ったことを繰り返し言うことや、分からないことは積極的に質問していくことによって対話を続けていくことが、よいコミュニケーション作りとなることを生徒に理解させてきた。このことが、資料の『対話集』を使った活動の中で生かされ、生徒自身が考えた語句や文を自己表現の部分で、コミュニケーションを意識して発表ができたことにつながってきている。こうした意味で、自然な流れの対話を意図とした対話例を、文法事項を組み入れて作成したことはたいへん意味があった。今後は、年間のカリキュラムに位置づけ、授業の中のコミュニケーション・プラクティスの活動として継続的に行っていきたい。

3. Team Teachingを通じた授業実践

授業ごとに、そのねらいについてALTと事前打ち合わせを十分に持ち、協同で行う授業の流れと、その中におけるお互いの分担について確認した。この時、JTE側の「ここは是非、こうした」というねらいをALTに明確に伝えることが大切であり、これが授業後の授業評価等の話し合いを焦点化し、充実したものにするということを痛感した。

ALTのコミュニケーションの図り方は、日本人とは異なる。生徒とのインタラクションをみると、彼らはコミュニケーションが成立するまで、その生徒にかかわっていく姿勢があり、それが生徒に良い印象を与えている。絶えず英語のシャワーを浴びせ、決して否定的な評価を与えず、必ず生徒の反応を引き出し、フィードバックする姿勢を持っている。彼らが常にコミュニケーションをベースに授業をしようとしている姿勢は、我々JTEが見習うべきところである。

「継続は力なり」とよく言われるが、生徒たちの動機づけを図り、少しずつでもその生徒なりの発想が表れた意見が増えてくるようにするため、発話を促す場を授業に設定し、指導の手だてを講じてきた。しかし、本研究はまだいくつかの問題点を残している。今後、考えていかなければならない課題については、次のように考える。

1. 発話を促す場の設定を授業に取り入れた表現力の育成を継続するとともに、今後は更に、「書くこと」を通じた表現力の育成をめざした指導法を探っていく。
2. ALTとJTEの双方の役割をふまえたティーム・ティーチングの授業実践を重ね、授業のねらい等について教師側の評価を行っていく。
3. 表現力育成をめざした、生徒側の観点別学習状況の評価を、効率的に行っていく。

我々の課題は山積されているが、大切なことは、理論研究や授業実践を通して、これからの英語教育の展望を、常に意識していくことであろう。「こんなふうに授業を展開したいという思い」や

「今日から少しずつ実践してみようとする工夫や手だて」を持って授業実践していこうと思う。

おわりに

国際化に向けてのコミュニケーション能力の育成が求められ、どのように言語を通してコミュニケーションを図っていくべきかということが、ことばでは簡単に叫ばれているが、理想的な対応の仕方、合理的な方法等については、まだまだ検討を要する。表現力の育成、特に「話すこと」の指導においては、身近な話題を数多く利用し、どんな小さな試みからでもまず実践し、更に継続して取り組むことが大切である。本研究が、表現力を育成していく上での一助となれば幸いである。

最後に、本研究を進めていくにあたって、ご指導をいただいた多くの先生方をはじめ、厳しく、ご多忙な職場状況にもかかわらず、快く授業実践を引き受けてくださった先生方、更に研究を支援してくださった各所属校の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

・主な参考文献

- | | | | |
|-----------------|--|-------|-------|
| 青木昭六 | 『英語教育ノウハウ講座11 学校英語の到達点』 | 開隆堂 | 1984年 |
| 岡 秀夫 編集、垣田直巳 監修 | 『英語のスピーキング』 | 大修館 | 1984年 |
| 和田 稔/浅野 博 編 | 『中学校学習指導要領外国語（英語）科の解説と実践』 | 小学館 | 1989年 |
| 和田 稔 編 | 『新学習指導要領の指導事例集 中学校外国語（英語）科 2 話すことの指導事例』 | 明治図書 | 1990年 |
| H. G. ウィドースン | | | |
| 東後勝明/西出公之 共訳 | 『コミュニケーションのための言語教育』 | 研究社出版 | 1991年 |
| 高橋正夫 | 『身近な話題を英語で表現する指導』 | 大修館 | 1991年 |
| 政清武司 | 『激動する時代に求められる英語授業』 | 大修館 | 1992年 |

・指導助言者

- | | | |
|--------------------------|-------|---------|
| 川崎市立橘中学校長 | | 札 川 喜 啓 |
| 川崎市立井田中学校長 | | 早 川 栄 一 |
| 横浜国立大学教授（川崎市総合教育センター専門員） | | 藤 岡 完 治 |
| 東京学芸大学助教授 | | 金 谷 憲 |

【資料1】 ショウ・アンド・テル (Show and Tell)

生徒のレスポンス例 (個人で)

教師が毛筆用の小筆を見せながらShort Speech

- Oh. Do you like Japanese カリグラフィー? • Are you brush very much?
- Do you play カリグラフィー every day? What do you read?
- Do you play カリグラフィー very well? • I don't like カリグラフィー.
- Oh, do you? I have a brush, too. • not big brush 2000円高い
- My not big brush 2 サウザン • I like not カリグラフィー.
- Pardon? What is this? • This is たかいですね.
- Do you have a large brush? • You are Japanese fude is beautiful.
- I'm sorry I don't know. • I like カリグラフィー, too. I am カリグラフィ4段.
- I don't like カリグラフィー. That brush is 高い. • I have a brush too.
- I like カリグラフィー too. But I am not うまい.
- 高いですね. どこで買ったんですか. ほう, 2000円もしたの. 習字するんですか.

生徒のレスポンス例 (4人班で)

教師が箸箱に入った箸を見せて

- My chopsticksは, キャラクター入りです. • Oh, yes.
- pretty chopsticks!
- Are your カラー?
- I have a chopsticks too.
- What is her chopsticks's ホワイト or レッド?
- Yes, my chopsticks is レッド.
- I have a chopsticks is ホワイト.
- Oh, I see. I have a chopsticks, too.
- Mr. Watanabe's chopsticks is beautiful.
- すてきな箸ですね.
- 先生は, その箸が気に入っていますか.

生徒のレスポンス例（6人班で）

貴花田（スポーツ新聞の切り抜き）を見せて

- He is Takahanada. He is 20 years old.
 - 優勝おめでとう。
 - He plays Sumo. He is nice. 男らしい。
 - He has a brother. He is strong. big!
 - His brother is Sumo player, too.
 - Sumo is interesting. great
 - He is a good boy.
 - 秋場所で優勝した。 最年少。 藤島部屋の出身。
 - 彼は、人気がある。 彼の兄も強いです。 横綱めざしてがんばれ。
 - 彼のいきがいは、すもうです。 彼はやさしそうです。 手がでかい。 ふとってる。
 - 彼は、ごはんをいっぱい食べる。
-

英文日記《授業実践4》より

① 一人目の発表

Thurs, Aug. 5 cloudy

We went to a hike to Goshikinuma today. Goshikinuma is a very large swamp.
Water of Goshikinuma was clear. Blue water looked just like a soda.
Red water looked just like Akashio. It was very beautiful water.
The landscape was nice around the swamp, too.

② 二人目の発表

Fri, July 23

In the evening I went to NEC Festival with my friend. We ate ice cream,
fried chicken, edamame, pop corn, fried potatoes and takoyaki.
I was full. A firework show began at about 8:45. It was very beautiful.
I like "shidare-yanagi". I came home at about 9:20.
I gave my younger brother a present. It was a toy monkey.
He was very happy with the present.

【資料2】 『資料集』より

(1) 文法事項, 対話に有効な表現, 自己表現を組み入れた 『対話集』

There is / are ... Is there / Are there ...?
(夏休み過ごした場所について)

A : Did you enjoy your summer vacation?

B : Yes, I did. I went to _____.

A : Oh, you went to _____. Were there many people at _____?

B : Yes, there were. / No, there were not. How about you? Did you enjoy your holiday?

A : Yes, I went to _____. There were not so many people. It was too cool there.

B : I know. There were not so many hot days in this summer.

must 疑問文 (テスト前の勉強について)

A : The Kawa-shin exam is coming. We must study hard.

B : I think so, too. Did you study last night?

A : Yes. I studied _____ and geography.

B : You studied what?

A : Geography, Chiri in Japanese. I must learn many things by heart.

B : Must we study music too?

A : No, you don't have to.

will ... 疑問文 (合唱コンクールを前にして)

A : The singing contest is coming. What will you sing, (どれ) ?

B : We will sing _____. How about you?

A : We will sing _____. We will get the first prize (金賞、最優秀)

B : No, you will not. We will get it.

A : I don't think so. Our song is very good and the pianist (名) is also good.

B : Really?

(2) 「対話に使える身近な単語」より

1. スポーツ (sports)

| | | |
|-------------------|-----------|----------|
| baseball | ベースボール | 野球 |
| soccer / football | サカ/フットボール | サッカー |
| basketball | バスケットボール | バスケットボール |
| volleyball | ヴァリボール | バレーボール |
| softball | ソ(-)フトボール | ソフトボール |
| handball | ヘアンドボール | ハンドボール |
| tennis | テネイス | テニス |

2. 机の上・部屋の中

| | | |
|-------------------|-------------|---------|
| pen | ペン | ペン |
| ball-point pen | ボールポイントペン | ボールペン |
| fountain pen | ファウンタソペン | 万年筆 |
| felt pen / marker | フェルトペン/マーカー | マジックインキ |
| pencil | ペンスウ | 鉛筆 |
| pencil case | ペンスウケース | 筆箱 |
| eraser | イウレイサ | 消しゴム |

(3) 「対話に有効な英語表現」より

1. 相手に聞き返す

Pardon? Excuse me? Sorry? Could you say that again, please?

2. あいづちを打つ

I see. Really? Oh, yes. Is it? Are you? Do you?

3. 相手の理解を確認する

Do you see (what I mean)? Do you understand? OK?

4. 同意する, 賛成する

I think so. I agree. That's right. Yes. You are right. That's good.

5. 不賛意を示す

I don't think so. I don't agree.

6. (1) 申し出て言う

Shall I ~? Can I ~?

(2) 申し出を受諾する

Yes, please. Thank you (very much).

(3) 申し出を断る

No, thank you. No, thank you, I'm fine.

TEACHING PLAN

Instructor: Toru Owada
Yoneko Narita(ALT)

- (1) Time and Date : 5th period for 1-1, December 17th, 1993
 (2) Teaching Material: Lesson 10 (Columbus English Course 1)
 (3) Allotment : 1st period; To acquire grammatical basis of the auxiliary "can" through some drill work.
 2nd period; To acquire the contents of the lesson 10.
 3rd period; To attain some command of communicative exchange with people through asking-answering drill using the said auxiliary. (Today's Lesson)
- (4) Objectives
 1 To have the students understand "can".
 2 To have the students communicate with ALT or other students through the activities
 3 To have the students respond and gives some comments willingly.
- (5) Teaching Procedure

| ACTIVITIES | | | | |
|---------------------------------------|---|---|---|---|
| PROCEDURE | JTE | ALT | STUDENTS | NOTES |
| 1 Greetings | Greets the students Has the students exchange greetings What day is it today? What is the date today? How is the weather today? | Greets the students Ask some questions | Greets the teachers Answer the question Friday. December 17th. It's | 会話に参加する意欲を持たせる。 日常会話は自然な口調で行う。 |
| 2 Warm up and Review | | Gives the questions to the student | Answer the question | |
| 3 Presentation of the target sentence | ALT: Do you know an English Tongue Twister? JTE: Maybe. Please tell me one. ALT: OK. "Peter~ ." Can you say it? JTE: Yes, I can. "Peter~ " ALT: Great! / Good try. | | Listen to the dialog. | 英語の早口言葉のリズムに慣れさせる。 |
| 4 Drill | Pair Practice ALT-Student Change part | | | |
| | S: Do you know a Japanese Tongue twister? A: No, I don't. Please tell me one. S: OK. "Nama~ ." Can you say it? A: Yes, I can. "Nama~ " S: Great! / Good try. | | | パートをかえることで、ALTに日本語を教えるという意識を持たせる |
| 5 Activities | Make 10 groups. Each group thinks about the word by Japanese letters. The students explain ALT about the word. They give some hints about it, and make ALT understand the word and learn it in English. S: Can you read this kanji? A: No, I can't. Please say it? S: OK. It's _____. Do you know this? A: Yes, I do. _____ No, I don't. S: I give you hints. ① ② S: That's right. How do you say _____ in English? A: It's _____ in English. S: Thank you. | | | 既習の英語を使い、漢字の意味をALTに理解させ、それに対する英語を聞きだすという活動における生徒の反応に注意する。 |
| 6 Consolidation (Guess Who Game) | Passes out the sheet and explains the game. | Explains the game. | Find out who the person is, asking ALT using "Can you ~?" sentence. | "CAN"を使った文章がしっかり理解できているか確認する。 |

- (6) Evaluation
 1 Could the students understand how to use "can" and get used it?
 2 Could the students actively take part in the communication practice?
 3 Could the students respond and give some comments willingly?